

(第三種郵便物承認)

高 クリーンゲタイムも

アイススラッシャーは、まだ体が暑さに慣れていない可能性の高い1回戦27試合で、各チームのベンチ入り選手に配る。選手よりも長くグラウンドに立ち続ける審判員には全試合で配布。試合開始前に摂取することを推奨する。

メーカーによると、アイススラッシャーは細かい氷の粒子が液体に分散した状態の飲料で、流動性が高いことから通常の氷よりも冷却効率が早いという。運動前に摂取すると、その後の体温上昇を抑制する効果が期待される。

同日、前橋市の上毛新聞敷島球場で開幕試合を担当した審判員4人は、試合開始前のグラウンド整備中にアイススラッシャーを摂取。同市の最高気温が33度に迫る中、2時間20分に及ぶ試合を無事に乗り切った。球審を務めた山根伸允さん(28)は「暑さ対策に有効と聞いていたので、事前に飲むことで気持ちに楽になった。実際、熱中症にならなかつたので良かった」と話していた。

アイススラッシャーの配布に

施設の模型を前に展望を語る安楽岡さん(左)ら



館林紬 再興へ拠点

館林市の伝統的な綿織物、館林紬の再興を目指し地元有志が設立した合同会社「紬・組」は6日、市内の古民家を改装しショールームや機織り体験の場を備えた拠点を整備する方針を発表した。同市仲町の館林パブリックハウスで開いた設立1周年行事で明らかにした。一

古民家で展示 機織り体験も

般から費用の寄付を募り年内の開設を目指す。施設名は「ツムギトエンガワ」。館林紬は現在は生産されておらず、在庫の反物で製品を作っている山岸織物(同市)の山岸清社長から、所有する築120年の住宅の提供を受けた。足踏み式など織機5台を置き、機織りのワークショップなどを行う。建物の南と西に縁

側のような通路を設け、来場者同士の交流の場にする。紬・組は昨年7月に発足。「日日濃」と名付けたシンボルカラーのしま模様を活用し、ネクタイや手ぬぐい、文房具など市内の事業者と協業しさまざまな製品を開発している。これらの展示・販売も行う。

一般から寄付募る

反物の生産再開を目指して両毛地域の事業者と交渉を進めている。代表社員の一人、安楽岡紀子さんは「本格的な復活へ向け、魅力を知ってもらいたい」と展望を話す。寄付は3000円から。施設に名前を掲示するほか、返礼品も検討する。詳細は同社のホームページやインスタグラムで発信している。(正田哲雄)